

「最も危険な政治家」  
橋下徹研究

上原善広  
ノンフィクション作家

死亡した実父は暴力団組員だった——。これまで一度も書かれなかった「橋下徹の真実」。

「みなさん、私は安中地区に住んでいました！」

二〇〇八年一月、大阪府知事選に出馬した橋下徹は、八尾市の街頭でそう演説した。八尾市安中地区には路地、いわゆる被差別部落がある。橋下は路地で育ったことを印象付け、同情票の獲得を狙ってそう演説したのでろう。

しかし、橋下が実際に長く住んだのは別の飛鳥という路地の中にあつた府営住宅だった。しかも「同和でなかったから、補助金をもらえなかった」と語ったこともある。そのため「橋下は同和地区で育ったと言ってるけど、ホンマは出身者やないんやないか」といった会話が、大阪

の路地で交わされている。そして当の安中では「ハシシタヤのに、なんでハシモトでなつてんや」と首をかしげる人たちがいる。確かに「橋下」という姓は、誰がどう読んでも「ハシシタ」だ。

大阪都構想を掲げる橋下はその過激な発言と強引な手法で、大阪府民の圧倒的な支持をえて府・市長ダブル選挙にうって出ようとしている。強大な力をもつ政治家として成長した彼は、果たして改革者なのか、それとも暴君なのか。状況はいま、それを見極めなければならぬところまできている。橋下の生い立ちに深くかかわるこの二つの謎を解くことで、彼の政治家としての本質に迫ることがで

きるのではないか。

そう考えた私は、彼の育った路地を歩いてみることにしたのだった。

## 安中の橋下家

橋下は一九六九年六月、東京で生まれたと自著に記している。父の実家のある大阪八尾で生まれたという説もあるが、橋下の記憶にあるのは渋谷区幡ヶ谷の商店街をはいったところにある二間のアパートだった。

物心ついた頃には両親が離婚しており、橋下は母子家庭の長男として、四つ下の妹をふくめた三人家族で育った。父親のことで橋下の記憶にあるのは、箸を投げ

たとき背負い投げされてぼこぼこに殴られたことくらいだという。

実父、橋下之峯は八尾市安中の出身だ。現在は一三〇〇所帯・三〇〇〇人ほどが住んでいる比較的大きな路地だが、都市部にあるため混住も進んでいる。

安中にある路地のもっとも古い記録は、豊臣秀頼がおこなった一六一三年一月月の検地帳にある「かわた」という記載だ。カワタというのは皮田とも皮多とも書き、とくに大阪に特徴的な穢多身分の呼称で、死牛馬の処理を生業としていた。徳川幕府の頃には生皮からとれる膠を生産しており、現在でも戦後になって廃業した膠工場がそのまま残されている。

明治維新の解放令によりカワタらは穢多身分から解放されたが、膠製造は路地のもっとも重要な産業となり、その成功から他の産業をする者も出るようになる。しかし裕福だったのは代々住む三家に限られ、貧富の格差は大きかった。この三家以外の姓の者たちは近世以降に他所から移ってきた者たちと考えられるが、橋下家もそのような者たちであったのだら

う。橋下家がいつ移ってきたのかは定かではないが、安中にある墓所には橋下徹から三代前の曾祖父の名が刻まれている。私はここで被差別部落や同和のことを

中上健次に做って「路地」と書いているが、これは偏見なく「路地」について読者に考えてもらいたいためである。

私は安中とは大和川をはさんで南側に位置する松原市更池という路地で生まれ育ち、父は今でも更池の地場産業であった精肉店を営んでいる。おそらく上原家は江戸末期までに、更池に移り住んできたと思われる。

## 父親の稼業

地元安中で橋下の父・之峯について団地の住民たちを中心に聞き取りをする、多くの人は口をつぐむ。安中にはその姉妹も住んでいるというのに「知らん」と、どこか忌避する雰囲気がある。後にわかるのだが、それは之峯が「ワケあり」の人物だったからであった。

之峯は戦前、この安中という路地に二男四女、六人きょうだいの長男として生

まれた。橋下という姓は、安中では「ハシシタ」と呼ばれている。

之峯を知る、ある地元建設会社役員はこう話す。

「あいつは酒梅組のヤクザで、地元でも知られた男や。モンモン（刺青）も入れてた。見かけはごっつい感じで、知事とは全然似てへん。同じムラ（路地）に住むT子と所帯もってたけど、このT子も女だてらに刺青入れた極道やった」

私は最初、この話を半信半疑で聞いていたのだが、取材を進めていくなかで之峯の弟・博照に会うことができた。

橋下にとって叔父にあたる博照は、かつて府議会でも取り沙汰されたことのあるいわくつきの人物だ。〇八年、橋下は博照にパーティ券を一〇〇万円分購入してもらっているが、その博照が関係する建設会社が公共工事を不自然な形で受注している、宮原威・府議会議員によって指摘されたのだ。これに対し橋下は「受注状況は、今知りました」「母親が再婚して以降は、やはり連絡はとれない」「知事就任以後、一切連絡はとっており

「最も危険な政治家」  
橋下徹研究

ノンフィクション作家

## 孤独なホピュリストの原点

上原善広

死亡した実父は暴力団組員だった——。これまで一度も書かれなかった「橋下徹の真実」。

「みなさん、私は安中地区に住んでいます。二〇〇八年一月、大阪府知事選に出馬した橋下徹は、八尾市の街頭でそう演説した。八尾市安中地区には路地、いわゆる被差別部落がある。橋下は路地で育ったことを印象付け、同情票の獲得を狙ってそう演説したのだろう。」

しかし、橋下が実際に長く住んだのは別の飛鳥という路地の中にあつた府営住宅だった。しかも「同和でなかったから、補助金をもらえなかった」と語ったこともある。そのため「橋下は同和地区で育ったと言ってるけど、ホンマは出身者やないんやないか」といった会話が、大阪

の路地で交わされている。そして当の安中では「ハシシタヤのに、なんでハシモトでなつてんや」と首をかしげる人たちがいる。確かに「橋下」という姓は、誰がどう読んでも「ハシシタ」だ。

大阪都構想を掲げる橋下はその過激な発言と強引な手法で、大阪府民の圧倒的な支持をえて府・市長ダブル選挙にうって出ようとしている。強大な力をもつ政治家として成長した彼は、果たして改革者なのか、それとも暴君なのか。状況はいま、それを見極めなければならぬところまできている。橋下の生い立ちに深くかかわるこの二つの謎を解くことで、彼の政治家としての本質に迫ることがで

きるのではないか。

そう考えた私は、彼の育った路地を歩いてみることにしたのだ。

## 安中の橋下家

橋下は一九六九年六月、東京で生まれたと自著に記している。父の実家のある大阪八尾で生まれたという説もあるが、橋下の記憶にあるのは渋谷区幡ヶ谷の商店街をはいったところにある二間のアパートだった。

物心ついた頃には両親が離婚しており、橋下は母子家庭の長男として、四つ下の妹をふくめた二人家族で育った。父親のことで橋下の記憶にあるのは、箸を投げ

たとき背負い投げされてぼこぼこに殴られたことくらいだという。

実父、橋下之峯は八尾市安中の出身だ。現在は二〇〇〇所帯・三〇〇〇人ほどが住んでいる比較的大きな路地だが、都市部にあるため混住も進んでいる。

安中にある路地のもっとも古い記録は、豊臣秀頼がおこなった一六一三年一〇月の検地帳にある「かわた」という記載だ。カワタというのは皮田とも皮多とも書き、とくに大阪に特徴的な穢多身分の呼称で、死牛馬の処理を生業としていた。徳川幕府の頃には生皮からとれる膠を生産しており、現在でも戦後になって廃業した膠工場がそのまま残されている。

明治維新の解放令によりカワタらは穢多身分から解放されたが、膠製造は路地のもっとも重要な産業となり、その成功から他の産業をする者も出るようになる。しかし裕福だったのは代々住む三家に限られ、貧富の格差は大きかった。この三家以外の姓の者たちは近世以降に他所から移ってきた者たちと考えられるが、橋下家もそのような者たちであったのだら

う。橋下家がいつ移ってきたのかは定かではないが、安中にある墓所には橋下徹から三代前の曾祖父の名が刻まれている。

私はここで被差別部落や同和のことを中上健次に倣って「路地」と書いているが、これは偏見なく「路地」について読者と考えてもらいたいためである。

私は安中とは大和川をはさんで南側に位置する松原市更池という路地で生まれ育ち、父は今でも更池の地場産業であった精肉店を営んでいる。おそらく上原家は江戸末期までに、更池に移り住んできたと思われる。

## 父親の稼業

地元安中で橋下の父・之峯について団地の住民たちを中心に聞き取りをすると、多くの人は口をつぐむ。安中にはその姉妹も住んでいるというのに「知らん」と、どこか忌避する雰囲気がある。後にわかるのだが、それは之峯が「ワケあり」の人物だったからであった。

之峯は戦前、この安中という路地に二男四女、六人きょうだいの長男として生

まれた。橋下という姓は、安中では「ハシシタ」と呼ばれている。

之峯を知る、ある地元建設会社役員はこう話す。

「あいつは酒梅組のヤクザで、地元でも知られた男や。モンモン（刺青）も入れてた。見かけはごっつい感じで、知事とは全然似てへん。同じムラ（路地）に住むT子と所帯もつてたけど、このT子も女だてらに刺青入れた極道やった」

私は最初、この話を半信半疑で聞いていたのだが、取材を進めていくなかで之峯の弟・博照に会うことができた。

橋下にとって叔父にあたる博照は、かつて府議会でも取り沙汰されたことのあるいわくつきの人物だ。〇八年、橋下は博照にパーティ券を一〇〇万円分購入してもらっているが、その博照が関係する建設会社が公共工事を不自然な形で受注している、宮原威・府議会議員によって指摘されたのだ。これに対し橋下は「受注状況は、今知りました」「母親が再婚して以降は、やはり連絡はとれない」「知事就任以後、一切連絡はとっており

ません」などと煙に巻いている。

博照はずんぐりした体形にスキンヘッドの強面、八尾市の公共事業を巡って横領で逮捕された前科をもつ。甥の徹については「迷惑がかかるから」と話すことを頑なに拒んだが、兄・之峯についてはこう認めた。

「アニキが入ってたんは酒梅組やない、土井組や。わしも入ったけど、今はもう解散してない」

土井組は博徒系のヤクザだ。かつて近鉄南大阪線沿いの針中野（大阪中南部）に拠点をおき、初代組長の永田熊吉は「土井熊」と呼ばれ恐れられた。小さな博徒の組とはいえ、九七年に神戸で射殺された宅見勝・山口組若頭も若い頃、土井組へ出入りしていたといわれている。

安中の膠産業は時代と共にすたれ、路地の多くの者たちは工場労働者となるが、そこからもこぼれ落ちた者たちは、極道になった。また差別も激しく、職業も限られた時代だ。戦後から八〇年代にかけて、路地の者で極道になる者は珍しくなかった。

と仕事をして、それからガス自殺したと聞いてます。葬式には行きませんでしたよ。団地の集会所でありましたから。そのとき奥さんはみえてない。徹ちゃんと妹さんと二人で来てました。博照さんが『こいつ、ものすごく頭ええねん』言うてましたね。あとは中学くらいのころ、会社で二回くらい会ったことあります。知事はハシモトで、こっちはハシシタて呼んでたから、最初わからへんかった」

之峯は晩年かなり落ちぶれていたという。「女と薬に狂って死んでもうた」という人もいる。不明な点が多いのは極道という生き方ゆえ、当然のことかもしれない。その後、東京に残っていた一家は徹が小学校五年生のときに大阪へ引っ越し、さらに一年後、吹田から飛鳥地区へ移ったことになっている。その3DKの大阪市の府営団地もまた、路地の中にあつた。ただ一般地区向けの団地だったので、同和対策の補助は出ていなかった。

## 飛鳥の府営住宅で

飛鳥は、もともと新田開発のためにつ

「ほかにも在日とか言われているけど、そんなことない。同和や。わしもアニキも同和やゆうのに誇りももった」  
と博照は言う。

「ベッキャンと呼ばれてたと聞きました」「と私が訊ねると「違う、ビキって呼ばれたんや」とだけ教えてくれたが、意味はわからない。現在、例えばネット上では「ビキる」というと「頭の血管をビキビキさせて怒っているさま」を指す。

路地の住人はこう話す。

「俺はベッキャンと呼んでたな。何してもうまくいかへんかったから、ベケやんってついたと思ってたんやけど。いかつい感じで、肩で風切ってちゅうんかな、そんな感じやった」

之峯はその後、一九六〇年代後半に東京へ出奔するが、その頃、徹の母と再婚している。之峯の東京行きは「刑事事件を起こしたので、時効になるまで東京へ逃げていた」と話す人もいる。その前後に、之峯は自らの姓を「ハシモト」という呼び名に変えたという。

橋下の母は週刊ポスト（二〇〇八年八月一

くられたカワタ村で、比較的新しい歴史をもつ。新大阪駅から近いという立地の良さから現在では一般地区からの転入が進み、二〇〇〇年の調査で路地の者は全体の四割ほど、在日韓国・朝鮮人が一割ほどになった。人口は一三〇〇人ほどだ。ここ飛鳥では小西邦彦・飛鳥会理事長が〇六年に業務上横領で逮捕、また同年に八尾安中では丸尾勇・八尾市人権安中地域協議会理事長が恐喝で逮捕されている。いずれも同和利権がからんだ事件で、大阪でもっともよく知られた路地といえる。そんな路地二つを、橋下はルーツにもっているのだ。

母子家庭となった橋下一家が、この飛鳥と呼ばれる路地に移ってきたのは偶然ではない。スラム化していた路地を整理し同和団地を建て、空いた土地につくられた府営団地はそのような社会的弱者を優先し、下町らしく時には荒っぽく、そして時には温かく迎え入れてきた。

引っ越しの多い子はいつも人間関係に思い悩むのだが、橋下が知事に立候補する前年に出した『どうして君は友だち

三日号）の取材に、「あの子が生まれた時点で、ハシシタ姓をハシモトと変えたんです。橋の下を歩むのではなく、橋のもとを見て注意深く生きていくように」と願って変えました」と語っているが、博照は「違う。アニキ（之峯）が変えたんや。俺はハシモトでいく、お前はハシシタでいけ言うて」と話す。

その後、ほとぼりが冷めたのか之峯は大阪に戻り、博照が一九七四年に設立した「丸万土木」という土建屋の手伝いはじめめる。その頃、徹を含めた一家が安中に一時住んでいたという話もある。

丸万土木は主に水道工事を請け負い、近隣の同和事業を一手に引き受けていた。「羽振り」は良かった。丸万のおっちゃんいうたらこの辺では有名や」と路地の人話す。国の同和対策事業でその頃仕事は沢山あった。しかし博照の博打好きのせいから放漫経営だったのか、丸万土木は九六年に倒産している。

当時の丸万を知る関係者はこう話す。

「之峯さんは、東京行って戻ってきてからは仕事なくて、弟の博照さんとちよっ

がないのか」（河出書房新社）には、「ジャイアンにつくスネ夫的な生き方をしてみてもいい」と記している。橋下の処世術の一つ「スネ夫理論」だ。

橋下によれば、引っ越してきた当初は比較のおとなしかった床屋の息子と仲良くなり、銭湯で同級生に恐れられている先輩中学生たちと知り合うことで何とかイジメを切り抜けたという。この床屋の息子は「小学生の頃はおとなしかったんですけど、その頃から背も一番高くてかっこよかった。東京の言葉がまじるから変な大阪弁しゃべってたけど、背が高かったこともあって一目おかれた存在でしたね」と、当時の橋下の印象を話す。

やがて地区の中島中学に入ると、橋下は不良のたまり場であったラグビー部に自ら入部する。不良のたまり場に自分から入ってあげば、それ以上はいじめられないだろうと考えたからだ。当時のラグビー部顧問・黒田光はこう話す。

「あの頃、荒れた生徒は生活指導の面からラグビー部か柔道部に入れたんですよ。それで中島中学でもラグビー部があった。



橋下が入ってきたときも二、三年にゴングタ(不良)が多く、非行の第二次ピークくらい。だけど橋下だけはちよつと違っていました。中学一年生で身長も一七〇くらいあったし、落ち着いていて正論を言うのでついたあだ名が『おっさん』。部屋は喫煙や飲酒する奴らのたまり場になつていて、一年生はタバコ買ってこいとかバシリさせられる。それで橋下はいつも何か用事を見つけて、道具を片づけるふりとかして私のそばにいましたね。橋下の学年は三人しかいなかったんですが、二年になると新チームを組むため、橋下は積極的に新しい部員を誘って入部させていました。他のクラブから一本釣りしたりもして、結果的に二年生だけで一六人、一年生で一五、六人集まった。このチームで四ブロック冬の大会で優勝したんです。橋下はキャプテンで、ポジションはバックス。自分から『こういう練習をしたい』と言って、ルールを読み込み戦略や戦術についても研究していましたね」

しかし利発で裏面目なラグビー少年だったかといえそうでもなく、二年生にそれからの橋下の集中力は教師も驚くほどで、結果は合格。

橋下は卒業文集にこう書いた。

「中島中学では同和教育をしている。前の学校では、ひとかけらもこんな教育を受けたことがなかった。まだまだ同和教育に反感をたくさんいだいている。完全に納得できないのもたくさんある。でもその中でただ一つ『仲間作り』の話だけ納得できるのは、その話が現実におこったことがあったからだ」

中学二年生の夏、橋下は自転車盗で補導されている。そのとき同級生たちと一緒にいたが、橋下一人が警察署に連れていかれた。しかし一緒にいた同級生たちはそのまま橋下が帰ってくるまで、警察署の前で待っていてくれたという。

「一年前、ぼくが自転車の事件の時みんな必死でかばってくれた。前の学校だつ

なるとオキシドールで脱色して茶髪にしたり、他校との乱闘に参加して逃げ惑い、ハードロックのバンドを組んではドラムを担当していた。遅刻も多く、そうした意味では橋下も「しんどい子」だった。周囲にもっと荒れた子が多かったため、比較的目的たなかつただけだろう。

母は保険の外交や夜の仕事もしており、二、三日泊りがけで出かけることもあった。そんなときは橋下が夕食の支度をして妹と二人きりで過ごした。その後、母は橋下が一四歳のときに再婚、橋下はその頃、家出したこともあったようだ。初体験は中学一年生のとき、テニス部の彼女とすませたという。荒れていた周囲にそれなりに合わせて機転がきく、早熟な少年だった。

「飛鳥地区の生徒たちは学習強化のため、子供会へ勉強しに行かなければならなかった。それでクラブは夕方六時までと決まっていたんですが、橋下はそれが不満だったのか、一人で私のところに『もっと練習したい』と直談判にきたこともありました。私が『学習も大事や』と言う

たらみんな逃げてしまっただろう。その他色々、なにかあったらすぐ飛んで来てくれる。本当に『仲間作り、仲間意識』があるのだなあと思えた。ぼくはこの四年間、同和教育で『仲間』の本質を理解できた。たいへんよかつたと思う。しかし、これからは他の高校に行つて視野を広げようと思う(一部略)

これは同和教育について「認めるところは認めるが、疑問は依然として持ち続けている」という意思表示で、同推校の卒業文集としては異例だ。当時はまだ自らの出自について、明確には知らなかったのかもしれない。

北野高校入学式の日、橋下は中島中学の黒田の元へ報告にきた。「どやった」と訊ねる黒田に、橋下は照れ笑いしながら「先生、ぼくめっちゃ浮いてました。これからアカンわいました」と言った。違反制服も軽いものにしてたのだが、北高には制帽もかぶらず第一ボタンをあけた者などいなかったからだ。

黒田は橋下についてこう回想する。

「結局、中島中学の教育は、橋下にとつ

と『じゃあ、強くなりたいというぼくらの思いはどうなるんですか。ぼくたちの学習保障に先生は関わってくれないんですか』と言ってきたんです」

一般地区出身ではあるが、中学では橋下と同じく路地にある同推校(同和教育推進校)に通い、橋下と同じ思いをしたことがあった黒田は、一瞬言葉も失った。黒田は食いが下がる橋下に「わかった、クラブの練習時間は職員会議にかけてみる。お前たちの時間外学習についても考えとく。けどな、飛鳥には飛鳥の事情があるんやからな」と言った。

「二人で暗くなるまで校庭で話しましたが、まるで大人同士のやりとりみたいでしたね」

### 過去との決別

そして三年の秋にクラブは引退、進路について訊ねられた橋下は「北野高校に行く」と宣言した。

北野高校は大阪府内屈指の進学校だ。当時担任だった白井一昭は、それまでクラブやバンド活動に明け暮れていた橋下

て何の関係もなかったのかもしれない。とりあえず中島中学の教育の流れには逆らわなかったけども、心の中は違っていたのでしよう。その後の北野で学んだことの方が、彼にとっては大きかつたのかもしれない

黒田の指摘のとおり、北野高校での橋下はまったく別人のように豹変する。黒田も「高校ではちよつとサボり傾向があったようだ」と話しているが、同級生の一人はこう話す。

「あだ名は橋下やから『ハシゲ』。体育の時間にバレーボールとかしてても、失敗した子がいたら徹底的に罵倒するんです。それもクラスの中で弱い奴にくつてかかる。あとは掃除の時間になるといつの間にかおらんようになる。校内大掃除とか、みんなやる作業でも徹底して拒否する奴でした。遅刻も多くて授業も真面目やなかつたし、休むことも多かつた。約束も守らんから、これといって友達もおれへんかつたんちゃうかな」

ラグビー部の元部員も同様にこう話す。

「真剣にやり始めたのは二年になつてか

ら。北高のラグビー部は練習が厳しいんですけど、やっぱり一年生のときが一番きつから、橋下はサボってばかりでした。サボるときも平気でウソつくし、ウソがばれても全然気にしない。要領ええとかマイペースとか、ちよつと変わった奴でしたな」

橋下本人も「遅刻は一〇五回しました」と認めているが、中学時代の評価とはまったく逆転してしまっている。

橋下の生い立ちをこうして辿っていくと、いくつものねじれの中で育ってきたことがよくわかる。

まず幼い頃に「ハシシタ」を「ハシモト」に変えられ、自殺した父の出身の路地とはかなり離れた路地で、継父の元で一般地区出身として育った。

そして路地の中学校とは一八〇度方針の違う進学校への進学。そこは甘えても誰も助けてくれない、現実社会の縮図そのものだった。この頃から橋下は、家族以外誰も信じられないと思ったのではないだろうか。

橋下の著書『どうして君は友だちがいゐる。』

この頃から茶髪にサングラス、皮ジャン、ブランド物を身に着けるようになり、車はボルシエ、バイクは大型のハーレーを乗り回していた。タレント弁護士としてテレビに出る頃には年収三億を誇ったという。

こうして経済的な成功をおさめた橋下は、次に権力の座を目指す。二〇〇八年二月、圧倒的な支持を受けて三八歳にして大阪府知事になったのである。

かつて、橋下は自身の政治家観についてこう記している。

「政治家はとかく『ウソは嫌いだ』なんて連呼しやがるけど、選挙のときの有権者向けの笑顔が、ウソ丸出しなんだよ！なんて『国民のために、お国のために』なんてケツの穴ががゆくなるようなことばかりいふんだ？ 政治家を志すちゅーのは、権力欲、名誉欲の最高峰だよ。自分の権力欲、名誉欲を達成する手段として、嫌々国民のため、お国のために奉仕しなければならぬわけよ。別に政治家を志す動機づけが権力欲や名誉欲でも

ないのか」は、「友だちなして生きてみる」という章から始まり、最初の小見出しには「友だちなしてためにならない」と記されている。路地の中学校では仲間の大切さを身にしみて感じたにも拘わらず、ここでは完全否定している。これは高校以降の実体験から出た言葉であることは確かだろう。

ただでさえ複雑な生い立ちをもつ橋下は、こうして己の深淵にいくつものねじれを抱いたまま、路地という社会の底辺から、自らの手足だけで這い上がっていくことになる。

### 政治家と弁護士の「資質」

早稲田大学政経学部をへて弁護士になった橋下は、大阪の樺島法律事務所に入る。樺島正法弁護士はかつて、解放同盟の武闘派リーダー朝田善之助の顧問をとめたこともある人権派だ。

「自分は同和地区で育ったと自慢げに話していたから、京都の同和住宅値上げ反対訴訟と一緒にしようと言ったら、京都の解放同盟員がずらりと並んで席で

いいじゃないか！ よほど人生の成功を収めた余裕がある人じゃないと真に他人のことなど考えてられない。ウソをつけない奴は政治家と弁護士にはなれないよ！ ウソつきは政治家と弁護士の始まりなのっ！」（『まっとう勝負！』小学館より抜粋）

その通り、橋下の言っていることの多くは「ウソ」である。具体的にいえば出馬が取りざたされたときから「二万パーセントない」と否定、その六日後に出馬表明したのは象徴的である。

また樺島弁護士は「弁護士時代は少年犯罪に取り組んでたて言うてるようやけど、それは絶対ない。少年犯罪ほど儲からんもんはないからやるわけない」と語っているが、黒田や臼井など中学校の恩師には「少年犯罪に取り組んでいる」と話してまわっていた。「ウソつきは政治家と弁護士の始まりなの」は、すでに始まっていたのだろう。そのウソはやがて確信的な政治戦術へと変わっていく。

政治家・橋下の戦術は大きく三つに分けられる。「大きく出ておいてから譲歩

『ぼくは同和はやりません。自分は同和じゃないから、補助金をもらえず同和を憎んでます』って言い放ちよった。それでこの件からは外れたけど、とにかく金に對する執着はすごかったね。入った時の初任給は四〇万やったんやけど、とにかく『食えない』と言ってた」

大阪弁護士会からまわってくる民事裁判でも、着手金を少しでも多く取ろうとして「取りすぎや」と弁護士会からクレームがつくこともあった。それでも「なんで取ったらアカンのや」と反論していたという。

樺島事務所では固定給のほかに、個人で取ってきた仕事は報酬の二割を事務所に入れれば良いというシステムだったが、一〇ヶ月後に橋下は一人で古いビルの一室で独立開業。当時としては珍しく積極的に営業に回り、人の嫌がる示談交渉を進んで引き受けた。叔父・博昭は「なんかあったらワシの名刺みせい」と言ったというが、橋下は自力で次々と示談を成立、年間五〇〇件ちかい案件をこなして、独立から二年後に現在の事務所に移って

する」という弁護士時代に培った交渉術、そして「裏切り」と「対立構図の構築」だ。これまでの日本の政治家は内部で駆け引きを行うことが多かったため、一般庶民にはわかりにくかった。橋下の画期的なところは、それを庶民に披瀝し、劇場化することにある。

裏切りでは、二〇〇八年一月堺市内のホテルで開かれた「木原敬介堺市長を励ます会」で、橋下はこう話している。

「木原市長は自治体のトップの理想モデル、自治体トップの神様だと僕は思っています。木原市長が堺の市長である限りは、皆さんは日本一幸せな市民であると思っています。逆になくなれば、堺市民は不幸になるんじゃないかと思えます」（二部抜粋）

その一〇ヶ月後、橋下は堺市長選において、府庁で自身の腹心である竹山修身・元政策企画部長を対立候補にし、自らも積極的に堺市に乗り込んで選挙応援を行った。そのとき橋下は「堺市は楽した馬、太った馬です。もつとムチをいれろッ」と、木原を揶揄した悪意ある演説

を行う。結果は竹山が新しい堺市長となるのだが、裏切られた形の本原は「橋下は生まれつきの詐欺師、生まれつきのポピュリストだ」と今も憤りを隠さない。

次に橋下は、平松邦夫・大阪市長を裏切り、対立を演出する。対立構図にのせられた平松はこう語る。

「以前までは仲が良く、それまでにやしきたかじんさんと三人で鍋を食べたこともありますが、自分の説は絶対に曲げないところが気になっていました。水道事業の府市統合構想がうまくいかなかった、大阪府があると自分の思い通りにできないと思ったのか、テレビや新聞で攻撃してきた。裏切られたと思いましたね。昨年二月くらいまでは携帯でも気楽に話す仲でしたが、それ以来、連絡はとっていません。もうそこからはきめつけの王者。次から次へとバーゲンのように言葉を出してくるだけで、彼に政治信条なんか無さ」

その平松との間を取り持とうとしてきた、倉田薫・池田市長は橋下の人物についてこう話す。

改革のためにつくられたもので、毎年全体の五パーセントにD評価がつけられ、二年連続でD評価とされた職員を懲戒・分限処分できることなどが話題となっている。橋下は持論をこう書いている。

「大きな看板に守られてきた人は、自分の裸の能力を認識させられる恐怖に耐えられない。自分の代わりになる奴がゴマンといることを知らされたときには自殺もんだ」(前掲書)

これは「代替えがきくような人になるな」という項目で書かれたものだが、実際に自殺者が出る事態となつてはまるで洒落にならない。

また全都道府県に先駆けて制定された「君が代条例」、そして現在、提出されている教育基本条例案も「公務員である教員が、上司である学校長の指示に従わないようなら辞めてもらおう」というもので、これも職員基本条例案と同様、つねに一定の割合の教職員に最低評価をつけ、連続で最低評価を受けた教員を処分対象にするといったもの。これにはさすがに教育委員会も反発、もし可決されれば府の

「知事は石原慎太郎さんとか小沢一郎さんの前では甘え上手なんです。府知事選のときも『倉田市長、ぼく選挙のことなんかわからないですよ』って言うってきたけど、彼のいうスネ夫理論は今でも生きてると思っちゃたね。思想は、一言でいえばウルトラ・ポピュリズム。ただし都構想なんて絵に描いた餅。大阪都にするには法の改正が必要ですが、今のねじれ国会で通ると思いますか。もし府市ダブル選挙になったら、罵り合いの汚い選挙になりますよ。だから私は『橋下市長』には反対しとるんです。せめてもう一期は務めなアカンやろと。知事が『独裁や』とか言うもんやから、ヒトラーとか言われてるみたいですけど、ヒトラーは違う方向にいったしまっただけで、そこへいかなければいいだけのこと」

### 大博打

府知事となった橋下は「大阪は破産会社、あなたたちはその従業員」と府庁職員の前で演説した。不況が長引くこの時代にあって公務員改革はもっとも大衆受

教育委員六人のうち教育長以外の五人が辞任する意向を示している。

橋下のやっていることは、経済的に成功したやり手のワンマン社長が部下にも自分がしてきたのと同じ負担を強いる構図そのもので、「ここまで成功した自分のできて、なぜこの程度のことがお前ができないのか」という理屈を府職員につきつけているようなものだ。

\*

二〇一一年九月一五日午後七時、大方の取材を終えた私は、大阪のホテルニューオータニで行われた「大阪維新の会」の政治資金パーティにきていた。一人二万円、集まった支援者は約三〇〇〇人。大阪府と各市に散らばる維新の会メンバーも一堂に会していた。

彼らに囲まれて登壇している橋下はしかし、不思議なほどオーラがない。一人ぽつんと立っているかのような、不思議な孤独感を漂わせているのだった。私は思った。これは「維新の会」ではない、誰一人信用できない「戦国武将の会」だと。そして倉田・池田市長の言葉を思い

けする手法だ。しかし、その弊害も出てきている。

橋下が府知事になった翌二〇〇九年の府職員の自殺者は二人だったが、一〇年には七人にまで増え、今年も二人が自殺。これまでは多くとも二人だったのに異常なことである。ある府議会議員は、府庁の内情についてこう話す。

「いま府庁はどうなっているのかというと、橋下から部長に無理な注文が出て、それを踏まえたマニフェストを作らされ、そこにはできないことも盛り込まれる。当然、現場からは『できません』と課長、参事級にあがってくる。だけど上からはやれといわれる。中間管理職は板ばさみです。橋下は血も涙もない人間ですよ。自分の言動がもとで自殺した職員がいるというのに、焼香にも行ってない。どんなに薄情か。彼は爬虫類のような目をしてる。もともと橋下は人を裏切るのも平気。職員基本条例案なんか、職員を公に見張るという条例ですよ。今まで夜も寝ないで働いてきた職員への裏切りです」

職員基本条例案は、府庁の公務員制度

出していた。

「彼は孤独な人やと思います。昔、選挙に負けたら『豊中(自宅)にこもって私利私欲にはしる』とか言ってたけど、進むのは大変やけど、退くのはもつと大変ですよ」

橋下の演説が始まった。タレント弁護士時代に培った弁舌はさわやかで歯切れがよい。いい男っ振りだ。「ズバツとした物言い、あれだけはアニキとそっくりや」とつぶやいた、博昭の言葉がふとよみがえってきた。

橋下は結局、河内の博徒であった父をも越えた「大いなる博徒」なのかもしれない。タレント弁護士として成功し大金も手に入れた。それを元手にして、河内の博徒であった父も成し得なかつた大博打を、彼はここ大阪で打とうとしている。これに勝てば大阪を元手にして、次には一世一代、国を相手の大博打が待っている。彼はきつとそれまで走り続けるつもりなのだろうと、私は会場を後にしながら思った。

(敬称略)

(うえはら よしひろ)